



しかはま自然観察会

のらえもん

『 人も 自然も みんな友だち 』

2020 年度

No. 5

2020. 7. 18~20

第5回活動 夏休みキャンプ体験

「コロナ対策をしながら、人と人との絆を深めよう」

コロナ禍のため、中止にしました。

新型コロナウイルス感染防止の効果が現れず、のらえもん主催のキャンプを中止にしました。

6月19日に、全国への移動が解除されました。が、その後、東京都の感染者が徐々に増え始めました。7月4日には、東京都から「行動自粛要請」が出されました。その後も益々増え、やむなくキャンプは中止の判断をだしました。

ただ移動の制限は解除されているため、任意の参加にしました。2家族7名がキャンプに向かいました。

・・・キャンプ裏話・・・

①初めてのキャンプは・・・

2010年7月30日～8月1日、のらえもん初のキャンプを、日光中禅寺湖畔の菖蒲ガ浜で実施した。

「なににもわからない」同士のキャンプだった。テントは、たったの一つ。鍋は借りて、昼食はコンビニの弁当。お楽しみの反省会は盛り上がりず早々にお開きになり、私だけがテントに残された。

この場所選定は、5月下旬に、女房と行った。

まずは新緑いっぱいの戦場ヶ原散策。双眼鏡を首にぶら下げながら花を愛で、湯滝の白い色と男体山に連なる山々を見ながらのゆっくり歩きは心底から爽快感が満ちていた。ガスで湯を沸かし、スープを飲みながら食べる自家製おにぎり！

バス停から菖蒲ガ浜へ行く。受付で話を聞き、場内を見て回る。温泉がありトイレは広く清潔なのを確認し、予約する。

今日の宿泊は、シーサイドホテル。中禅寺湖の出口にあり、食事・温泉も良かった。

翌日は、中禅寺湖遊覧船に乗った。途中の立木観音で下車し、願掛けに行く。このころ、二男が停職につかず、一番の悩みだったからだ。坊主が丸い玉を出し「願いごとをいいながら玉を磨いていくと七色に変わります。最後に紫色になると願いが叶います」という誘いに引かれ、女房は千円を出して買った。坊主が言うので、まさかと

は思いながらすがる気持ちが働いた。(今ではその玉はどこにあるかさえわからないし、色の変化は無かった。坊主までが・・・という思いだ。)

最後は、華厳の滝を見物して、のらえもんキャンプの実施調査を終了した。

②3回目のキャンプは・・・

菖蒲ガ浜のキャンプの3回目は、なくなった。湖の広がり・砂浜での水遊び・カメラもできそう！と、期待は膨らんでいた。しかし、予約がとれなかった。小中学校の林間学校の予約でいっぱいとのことだった。

そこで、頭に浮かんだのが「日光だいや川オートキャンプ場」だった。急いで電車とタクシーを乗り継いで、会場の調査に行った。キャンプ場はコナラの林間の中だった。小川があり、トイレ・炊事場も整っている。その上、回りに売店やアスレチックもある。ここに決定し、みんなに連絡をした。

いっきにテント9張りに増え、57名の参加だった。小川は子どもたちの遊びの中心になり、カエルやヘビをつかまえ、男女幼小中が一体になって動き回っていた。カブトムシを探したり、大谷川の巨岩に座って町の花火見物をしたりした。3日間とも晴天で、たくさんの思い出ができたのだった。

翌年も、ここでキャンプをした。2日目の夕方は、突然の雷雨に見舞われ、小川は一気に増水し、冷やしてあったスイカ2個は行方不明。スイカ探しに、齋藤さんのお父さんが、あの豪雨の中を出かけて行った。帰って来たとき、両手にスイカを持っている。齋藤さんの、冷静さと熱意には脱帽だった。

③一味違う古民家キャンプ・・・

のらえもんのキャンプ会場は、2年ごとに変わってきた。それは、里山のフィールド活動を続けてきたために、次の会場が見つかったからだった。

そうしてたどり着いたのが、4ヶ所目の古民家だった。

古民家は、みなかみ町の藤原にある。その一畝田というところに、目的の古民家がある。ここはNPO利根川源流ネットワークが借り受けている。のらえもんは、整備に協力し、資金も15万円提供した。「のらえもん活動の拠点にしたい」という願望があったからだ。床が張られ、窓が入り、なんとか利用可能になったので、7回目のキャンプは、古民家ですることにした。活動を重ねる毎に、古民家が少しずつ整備され、利用し易くなるだろうと思っていた。

2016年7月22～24日、32名が集まった。

ワンフロアの使い勝手はすばらしかった。何家族も集まって、活動や食事をいっしょになって出来た。そして、人同士のつながりがありあたたかさが生まれてくるようだった。テーブルつきの囲炉裏を囲んでの反省会は、至福のときであった。

古民家のすぐ裏は雨呼山の登山口で、幼児にも手頃で、すばらしいハイキングコースだ。頂上からは、藤原の棚田とスキー場、そのさきの武尊山を一望できる。また、歩いて5分もかからないところに町の体育館があり、夕食後は親子そろってドッチボールや大縄跳びを楽しんだ。その帰りの真っ暗な田んぼ道を、満天の星とホテルの乱舞が迎えてくれた。

地域とのつながりも深まりはじめていた。

民宿関ヶ原は、過去にのらえもんが何度も利用させてもらっていた。そのため、行く度に挨拶に伺い、キャンプの昼食にはカレーライスやおにぎりを用意してもらったりした。また、阿部さんにはいろいろな食材を差し入れてもらい、大変助かった。野菜作りをしている高田さんからはじゃがいも・ねぎ・たまねぎ・キャベツなどを購入し、地産地消に協力したこともあった。

地域活性化の施設としてある「遊山館」は、トイレをいつでも利用できるのもとても助かったことをおぼえている。

毎年訪れる活動を通して、地域とのつながりが点から面へ少しずつ広がり始めていたのだった。

「いいことは、長く続かない」が世の常である。ここも、例外ではなかった。いままでに6回ここを利用させてもらい、行く度に不満が募ってきたからだ。

不満の最たる事は、「古民家の整備・整理の積み重ねが全くできなかった」ことに尽きる。

行く度に、居間に置かれている荷物を片付けぞうきんがけし、帰りにはきれいな状態で玄関の戸を閉めてきた。が、次回に行ってみると、居間には新たな荷物が置かれ、その上、天井や壁などの修理は全く進んでいないのだった。さらには、土間に廃油の一斗缶が10個以上も置かれたままなのである。

戸を開けたとたん、疲れがどっと出てきた。その繰り返しが続いたのだ。

「なんだよ」「いい加減にしてくれ」と、怒りが募ってくるばかりだった。

NPOの責任者には、利用前後に、必ず依頼と報告をしてきた。整備が進んでいないので、「作業があるなら、手伝いますよ」とも呼びかけてきたのだが……。

堪忍袋の緒が切れた。2019年4月の自然塾：古民家宿泊体験の時、3年前と変わらず、いやむしろ状態が悪くなってきているのだった。古民家の利用とともに藤原のフィールドから去ることを決めた瞬間だった。

去るに当たって、10年間の活動を支えてくれた藤原のみなさんに御礼と感謝の気持ちを含めて、一番お世話になった民宿関ヶ原で最後の晩餐会をおこなった。

バス1台、総勢24名で藤原を訪ねた。夕食の前に、たくさんお世話になった関ヶ原の女将さんに感謝の「ハッピーバースデー」会をし、子どもがお礼の手紙を読み上げた。もう、のらえもんとして来ることはない、最後の日となったのだ。

「のらえもんのキャンプは2年毎に場所が変わる」というジンクスは生き残ったのか。2018年7月14～16日に、新しいキャンプ地である日光土呂部「キャンプインドロブクル」に、42人が集まった。ゲンジボタルの観察・魚のつかみどり・川遊び・キャンプファイヤー・花火と、盛りだくさんの活動を楽しんだ。清流に挟まれた広いキャンプサイトにはおびただしいほどのトンボが、時には頭や手に止まってくれる。里山を案内し、ハンモックで遊ばせてくれた日光茅ボッチの会の代表である飯村さん。この集落唯一の民宿水芭蕉苑の女将さんには、メイプルシロップづくりのツアーに参加したときお世話になっている。

2020年は3回目のキャンプであった。が、コロナのため中止になった。のらえもんのキャンプには、同じ場所での3回目は、「ない」のか？新たな挑戦が始まる。